

秋江『黒髪』ノート

山本昌一

秋江の「黒髪」を称賛した作家、批評家が多い。名前だけをあげても正宗白鳥、谷崎潤一郎、吉井勇、宇野浩二、伊藤整、大岡昇平、平野謙^{注一}といった人達だが、これにたとえば小林秀雄と川端康成あたりでも追加すれば、まずある時期までの読み巧者のほとんど全部が太鼓判をおしたという事になるのではないか。実のところ川端康成、小林秀雄がほめたかどうかは判然とはしないけれども、ほめてもおかしくない人達だし、案外愛読していたのではないかと思われるふしもある。^{注二}

ともあれ、「黒髪」は秋江の著作の中では文句なく第一級の作品であることは右にあげた評家のうちの、たとえば谷崎潤一郎がはじめに「僕がほんとうに君を尊敬し、君に対して帽子を脱ぐ気になったのは、此の小説からだ」と云つていい」と書き、再度『「黒髪」は今度読み返してみても感激を新たにした。昔私はこれが中央公論に発表された当時^{注三}大いに感激したのであつたが、今度読んでみても矢張りさうであつた」と二十五年後にもその「感激」を語っているのを見てもわかる。やはり並大抵ではない。これは単に序文としての挨拶でもない。谷崎と同じ時期に京都で秋江に会っている吉井勇も「人間の情痴に対する苦悩

がこの位痛切に書き現はされてゐる作品は、日本文学中古今に比がないと言つてもいい^{注四}」と語っているが、これはやや解説文としての儀礼が感じられるけれども、ただ谷崎も吉井も作者歿後の文章であり、別に遠慮もいらぬはずである。言葉通りに受けとつていい。吉井のいう「日本文学中古今に比がない」かどうかは別にして、「人間の情痴」が「痛切に書き現はされてゐる」ことは確かなのだ。

さて、この稿はこの「黒髪」の評価史を述べようとするものではない。この作品の有っている性質をいくらでも明らかにすることにあらが、私の「黒髪」に対しての評価に対する援軍として諸大家をあげてみたわけである。要は「黒髪」は名作であると言いたいにすぎないのであり、まずはじめにそのことを確認しておきたかったのである。また秋江自身も『現代小説全集 第十二巻』（大正十四年十一月新潮社）の「年譜」の中で、次のようにいつている。

大正十一年一月「改造」に「黒髪」を同誌四月に「狂乱」を発表す。前者の統篇なり。同年五月「新小説」に更にその統篇「霜凍る宵」「統霜凍る宵」を発表す。作者やゝ会心の作なり。

(傍点山本、以下同じ)

比較的長い自筆「年譜」の中で「会心」という言葉を使うのは「黒髪」と翻訳「生ひ立ちの記」と「二人の独り者」だけなので、かなり自信ある作であることがわかる。やや月並みないまわしだけれども自他共に許した名作であるわけだ。しかしこの稿は今いう通り名作たるゆえんをいたてるのではなく、「黒髪」のもつ問題をいくつか提出してみることにあがるが、なお以下の記述において二重カギの『黒髪』の場合は単行本としての長編小説をさし、一重カギ「黒髪」は「狂乱」「霜凍る宵」などの同じく雑誌初出の章立てをさすことをさしあたりおことわりしておきたい。引用の下に数字は単行本『黒髪』のページを示している。

『黒髪』はなかなかわかりにくい作品であるが、細部を仕細にみるとはっきりしない部分が多く、解釈のしにくい箇所が色々とある。主人公「私」は相手の「女」について「無愛相むあいさうなくらゐ口数の少ない女」と叙述しているが、この連作『黒髪』を語る「私」も「口数」は多くなく、大事なところでは口を閉じている。さらに「何故この女は私に真実の心を明かさないのであらうか」(五十九ページ)というけれども、読者にとって「私」も知っているに違いない事につき「真実」を「何故」明かさないのであるという処がかなりあって、「女」のことばかりを「私」はせめられないという感じがする。たとえば第三「三」章のくだりがそうである。男は一年半ぶりの女からの呼び出しに対し、いそいそと東京から京都まで出掛けるわけだが、何故女がその時点で「私」

を呼び寄せたのか最後まではっきりとしない。

「……そして急に話したいことがあるから来てくれと云つたのは何の事だい?」

さういつて訊いても女は黙つて答へない。重ねて訊くと、

「それは又後で、話します。」と、いふ。(『黒髪』一八ページ)

「女」がしばしば繰り返すことになる「後で」という答が出ただけで、真の答えは出さないまままでこの時は終っている。そうしてこの「後で話します」は一年半後の再会の折にも繰り返され、「女」の基本的な態度となっているのだ。

短編集『京美やげ』(大正九年九月二十日 日本評論社出版部)に収められた「冬の夜」(一八九〇二四〇ページ)の前半は「黒髪」と全く同じ内容の小説であり、女から呼び出しをうけた男が京都へ行き一晩女と会い、そして帰京の途中横浜で「去年の夏の頃から関係のある女」(二二二ページ)をたずねるといふかなりあぶなっかしい話であるが、この小説では呼び寄せる女が男に対し「私あんたはんにもうお断わりしよう思ふて。」(『京美やげ』二〇二ページ)というくだりがある。別れたいという理由をはっきりしないが、呼び寄せたわけはこれでわかる。別れ話をしようということであった。これに対し「黒髪」は具体的な理由をいうのを避けるのである。改めていうまでもないが「冬の夜」と「黒髪」はほとんど同じ題材といふべきであり、いわば書き直しでもある。もとよりそれぞれが独立した作品であることは事実だが、内容の関連は見逃すことはできない。同じような題材を

扱い、しかも「冬の夜」の後半に書かれるような横浜の女との火遊びの部分の切りすてと共に、女からの別れ話をもちだすくだりの削除は「黒髪」を「冬の夜」とは別の意図のもとに再構築しようとしたものであることを示している。やや先ばしつていえば『黒髪』は女からの愛想づかしの小説とはいえないのである。

わかりにくいといえは主人公は「一ヶ月」ほど女の家に同居したのであるが、女がそれまでの態度を一変して男を家においたのかその理由も定かではない。「自分の方から随分詰問した書面を送ったこともあつたが、女はそれについては、少しも、此方を満足せしめるやうなはつきりした返事を寄越さなかつた」(二二ページ)女が態度をかえる裏には何かあるはずである。また当然男もそれを知っていなければならぬ。それにもかかわらず、そのことについては何のコメントもないのであり、男女が同居するのに別に理由はいらぬわけだが、この女は自由な立場にいる者ではない。いわば縛られた人間である。その女が一ヶ月も勤めを休んで男と暮らしたことには何かなければならぬ。このことについて「あれは格別に主人の計らひで公けにそうした」(六六ページ)とわずかに触れているが、その「公け」の「計らひ」とはどういう目的であつたのか。その辺もしかとした理由は示されていないのである。

しかしわかりにくい点の中で最もわかりにくいのは「女」の母親のありようかもしれない。『黒髪』「五」章で女と母との家族についてこゝう「私」は語っている。

親は、六十に近い母が今は一人あるきり、兄弟も多勢あつたが、みな子供のうちに死んで、たつた一人大きくなるまで残つていた弟が、それも二十歳で亡くなつた。……生命の綱とも杖とも柱とも頼んでいた弟に死なれてからは本当の母ひと娘ひとりのたよりのない境涯であつた(三三ページ)

「女」には実の弟があつたのである。そしてこの母は姉弟の母であるはずだ。それが「霜凍る宵」では次のようになってゐる。仲介に入つた隣の主人は

「えゝ、(*女が) 真実の子やないのやさうにおす。」と私に答へて置いて、「姉さんそれで今えらう泣いてた。私も一緒に泣かされた。」(一九六ページ)

といい、二人が「なさぬ仲」であることをここで始めて明らかにしている。しかし、「女」が母親と「なさぬ仲」であることはありうるが、「多勢」の「兄弟」があり「たった一人」残つたという弟までもが「なさぬ仲」であるというのは腑におちない感じがする。「女」が実の子かなさぬ仲かのどちらかでなければならぬが、「私」はここへ来て前の話を忘れたかのごとく「女」は「真実の子」ではないのだと思ひかえし――

どうも真実の母子でなかつたら、あゝではあるまいかと思はれることもあります。(一九九ページ)

と簡単に母親がなさぬ仲だからこそ「女」も自分の思い通りにはしないのだといった「女」に対する同情に気持ちを變化させてこゝういつて

いる。さらに念を押すのごとく、仲介の主人の母親をして

「いや、世の中は広うおす。世の中は広うおすわい。……実の子やったら、あの商売はさせられまへん。本当の親にそれがさせられよつたら、鬼どす。鬼でなうて真実のわが子にそれがさせられるものやおへん。」(一九六ページ)

と慨嘆させているのである。そうしてここでは母親は「女」と「私」を引き裂く悪役として力強く登場してくることになるわけだ。

「私」が母親に以前会った時には「むくつげな婆さんであつたが、それでも話しの様子には根からの廊者でない質朴のところ」(四二ページ)がある母親であつたが、「霜凍る宵」の章すなわち『黒髪』の「十五」章あたりからいささか様子が違ってくる。「私」に対し「貴様ひとりで、勝手にさつ／＼とうせえ。内の娘はそんな処へ出て往く用はない。」(一八三ページ)とか「勝手にせい。此度来たら寄付けへん。」(一七一ページ)とか以前のイメージとは全く変つた鬼姿的な存在となつて表われるのである。「女」の家に逗留してゐた時分に見て思つてゐた母親とは、まるで打つて變つた悪婆らしい本性を露出して来た「(一五七ページ)」という「悪垂れ婆」となるわけだ。「実の子」にこんな商売をさせるのは「鬼どす。」ともあつたけれども、なさぬ仲の母親は「鬼」に近い存在として「私」の前に立ちただかつてくる。数すくない登場人物の中で一番変化するのはこの母親である。

これには連載の問題もからんでいるかもしれない。「黒髪」から「霜凍る宵」まで七ヶ月の期間があるが、この間における作者秋江の

心境の変化というものがあつて、作品の意図の変更というものがあつて、母親の取り扱い方にそういったものがひそんでいるようである。次に発表の過程について触れることになるが、そこではたとえば第二章ともいふべき「狂乱」には雑誌初出の際に「黒髪」の「続篇」として付記されているが、「霜凍る宵」などにはそれがないということもある。ただ後の先にあげた自筆年譜には「霜凍る宵」などを「狂乱」などの「続篇」として語っている^{注五}ので、はじめにその辺を書誌的に整理しておくことにする。

注一

正宗白鳥「解説」(岩波文庫『黒髪』昭和二十七年三月)など、谷崎潤一郎「序文(＊ただし序文という題はなく無題の文章)」(近松秋江『黒髪』(大正十三年七月(二十五日)、同「序」(創元選書122『黒髪』(昭和二十二年七月 創元社)など、吉井勇「解説」(日本文学選『黒髪』(昭和二十四年七月 光文社)など、宇野浩二「解説」(『近松秋江傑作集 第一巻』(昭和十四年八月 中央公論社)、右創元選書版「解説」他、伊藤整「近松秋江」(角川文庫「作家論Ⅰ」昭和三十九年十一月)など、大岡昇平「近松秋江『黒髪』」(『詩と小説の間』昭和二十七年七月(十五日)など、平野謙「作家と作品近松秋江」(『日本文学全集14 近松秋江集』昭和四十四年二月)他多数など。

注二

川端については不明だが、たとえば創元社の編集顧問であつた小林の推挙による創元選集版『黒髪』の出版など考えられる。ただ直接のきっかけは大岡昇平などの薦めなどかもしれない。

注三

注一参照。

注四 注一の吉井文。なお宇野浩二も「この秋江の『書きたることは悉く自

己を欺かざる』小説は、誇張していふと、古今東西に無類の作品である」
『近松秋江傑作選集 第一巻』と同じようなことを述べている。

注五 本文の引用はとくにことわらないかぎり単行本『黒髪』（以下書誌的
に説明する）によっている。

* * *

長編小説『黒髪』のはじめ「黒髪」は大正十一年一月「改造」に発表された（二八六～三一四ページ）。章を「一」から「六」にわかち、篇末は「をはり」となっている。ついで「狂乱」は大正十一年四月、同じ「改造」に掲載された（七二～一二九ページ）。章を「一」から「十」にわかち、篇末に「一月号『黒髪』続篇」とあり「をはり」と付記されている。さらに掲載時に明記されていないが、そのつづきたる「霜凍る宵」は大正十一年五月、別誌である「新小説」に発表された（六四～八四ページ）。章を「一」から「四」にわかち、篇末に「をはり」と付記がある。さらにつづけて終編「霜凍る宵続篇」は大正十一年七月、同じ「新小説」に載せられた（四九～七〇ページ）。章を「一」から「三」にわかち、篇末に「をはり」と付記がある。この「霜凍る宵続篇」は目次、本文とも同じであるが、ページ上にある小見出しには「霜凍る宵」となっている。「霜凍る宵」の続編であることはこれでもわかるが、これが編集者のしたことか、作者秋江のしたことであるかどうかはわからない。

単行本『黒髪』は二年後の大正十三年七月（十五日）新潮社より刊行された。右に述べた「黒髪」「狂乱」「霜凍る宵」「霜凍る宵続篇」

の四章の題名をはずし総題に「黒髪」として全二十三章の通し番号とした。これで長編小説になったわけである。そして奥付け裏の広告に「三部作」として「第二巻 痴狂（黒髪続巻近刊）」「第三巻 旧恋（同）続刊」という予告が付けられた。

この「三部作」なるものについてはよくわからないところがある。紅野謙介氏が新潮社の出版目録をもとに「第二巻」「第三巻」は刊行されなかったであろうと推定されているが、^{注二}これは私も同感である。しかも誰もが気づいているように実際に「痴狂」という題の小説、「旧恋」という題の小説があるわけでそれとこの「三部作」との関連が次の問題として出てくることになる。

田沢基久・紅野謙介両氏編「近松秋江作品年表」^{注二}によれば「二人の独り者」は大正十二年一月五日から四月十九日にかけて、九十六回にわたり連載となった。そして十二年の八月（二十日）改造社から『二人の独り者』として単行本となった。それが二年後の大正十四年十一月『現代小説全集 第十二巻』に再録されるとき、始めて『痴狂』と改題となった。この『痴狂』と「三部作」に予定された『痴狂』とのかわりということになる。いっぽう「旧恋」なるものは、同じ題名の「旧恋」は大正十二年三月の「新小説」に「旧恋」続篇は六月の「新小説」に発表された。これは「誕生五十年記念」とサブタイトルのある選集『恋から愛へ』（大正十四年五月（二十三日）春陽堂）に収められた。つづいて『新選近松秋江集』（昭和三年十月 改造社）に収録されている。この「旧恋」と「三部作」の「旧恋」とのつながりも

また問題としてあるわけである。

そこでこれは推定になるわけけれども、『黒髪』に予告された「痴狂」は秋江自身は新稿を考えていたのではないだろうか。というのはもし『二人の独り者』の改題である「痴狂」がそれに当たるとすればすでに立派に本となって刊行されていたわけで、版權その他の問題はあつたにしても「三部作」の中に組み込むこともできたであろう。逆にむしろ『黒髪』を『二人の独り者』の「続篇」として、あるいは「前篇」として、あと「旧恋」のみ未刊の「三部作」とすることが出来たはずであつた。また内容的に見ても、『二人の独り者』は『黒髪』の情緒あふれる渾然とした世界にくらべやや異質の感じで、それだからこそ類縁の作だとする考えも成り立つけれども、やはり『黒髪』に資するものではない。大正十四年での改題は新稿を断念した秋江の「三部作」構想への執着を語るものであらう。

「旧恋」も「痴狂」と同じことがいえるかもしれない。『黒髪』刊行時において既に「旧恋」も発表されていた。もし「二人の独り者」が「三部作」構想の一つであるとすれば、のこりはこの作だけの問題となるのだけれども、実際には「三部作」予告において「痴狂」は「近刊」とし、「旧恋」は「続刊」となっている。完成はまだという感じである。発表されている内容からすればこの「旧恋」の方が『黒髪』の裏話としてはより具体的な記述が多く作品的に近いものである。

「旧恋」と『二人の独り者』との関係はどうか。『二人の独り者』のうちの「一人」の方、秋江を思わせる人物は「田原」といい、「旧恋

続篇」の主人公も「田原」なにがしである。いずれも女を追いかけて日夜懊悩している人間であるが、この両編は三人称の小説であり、「私」が語る『黒髪』とは人称においてはちがっている。ただ「旧恋」といい「二人の独り者」といい描写が微細にわたっていて、女を捜す執念深い行動の記述ということでは共通するところがあるが、これが新稿を秋江が考えているとしたら、その新稿は一体どういふものであつたか。それは今のところ不明という外はない。さしあたり「三部作」の他の二作は新作を考えていたと推定したい。

この単行本『黒髪』はつづいて現代日本文学全集第三十二編『近松秋江 久米正雄集』（昭和三年四月 改造社 一一〇～一八七ページ）に再録された。本文の異同はないが、この全集の性格として総ルビとなった。これには秋江はおそらく与っていない。さらに明治大正文学全集二十四巻『近松秋江 宇野浩二集』（昭和四年十月 春陽堂 三〇～一〇六ページ）に入れられた。本文の異同はここでもないが、僅少のバラルビとなっていて、本文は単行本『黒髪』に近い。

ところが「徳田秋声、正宗白鳥、上司小剣 宇野浩二監修」を謳い実質的には宇野浩二が編集したと推定される『近松秋江傑作選集 第一巻』（昭和十四年八月 中央公論社 一一七～三六三ページ）所収の本文は章立てがかなり違ってくる。単行本『黒髪』の「一」から「二十三」まで通しの章立てを廃し、雑誌の初出の形態に一部もどしてあるが、一部は変えられている。すなわち「黒髪」「狂乱」「霜凍る宵」の三章とし、「黒髪」は雑誌初出「黒髪」と同じ「一」から「六」と

し、「狂乱」は雑誌初出が「一」から「十」までだったのを「一」から「八」までと二章を少なくし、「霜凍る宵」の方に二章を移し、雑誌初出の「霜凍る宵」「霜凍る宵続篇」をあわせて一つにし「一」から「九」までとした。「狂乱」の区切りが大幅にかえられているわけだ。やや大げさないいまわしをすれば雑誌初出文とも単行文とも違った『黒髪』が出現したわけである。ただこれが秋江自身の改定なのか、あるいは宇野浩二ら編集に携わった人達の処置なのかは判然としない。ただ本文の方もたとえば雑誌初出、単行本で「女」の名前が商売上では「お園」と呼ばれ、私的には「お幾」と呼ばれていたのを全て「お園」に統一しているのを見ると作者以外の者が勝手にできるとも考えられないので、秋江自身による統一とも思われる。しかしそうとはばかりともいえない面があるのだ。というのは、秋江^{い、い}後に刊行された創元選書版122『黒髪』（昭和二十二年七月（三十日）創元社）では本文がわずかではあるが変えられ、たとえば主人公「私」を初出以来『近松秋江傑作選集 第一巻』まで「××さん」とあったのを「あのお方」（『創元選書』版一四五ページ）とかあるいは「あんたはん」（同ページ）とかよび方が改定されてしまっているのであって、秋江が生前に本文を校定してあったという付記もないので、私の推定では『近松秋江傑作選集 第一巻』の本文も宇野浩二の校定にかかるのではないかと考えるのである。章の改変、主人公の名前の変更など作者ならぬ編者がなすべきことではないが、創元選書版がそうなっているのだから推定も傑作選集の改訂の場合可能だし、年譜によれば『近松秋江

傑作選集』刊行の前年たる昭和十三年一月には「左眼まつたく失明」という記述もあって、校定などこまかな仕事を宇野に任せたとと思われる。あるいは近松が指示をし、宇野が事にあたったのかもしれない。以後の版は多くがこの創元選書版を踏襲するのである（『岩波文庫』《昭和二十七年三月》、福武書店版『黒髪』（昭和五十八年六月三十日）など）。本文そのものがすっかり改変されたわけでは決していないが、語句の訂正、章立ての変更などかなり微妙な手入れと変化があるといえよう。『黒髪』の章立ての変化を表にすると次のごとくである。

一 二 三 四	「狂乱」（大正十一年四月 「改造」初出）	一 二 三 四 五 六	「黒髪」（大正十一年一月 「改造」初出）
七 八 九 十		一 二 三 四 五 六	単行本『黒髪』 （大正十三年七 月二十日新潮社）
一 二 三 四	狂乱一七三〜二六二ページ	一 二 三 四 五 六	『近松秋江傑作選集第一卷』（昭和十四年八月一日中央公論社） 黒髪一一八〜一二二ページ

五	六	七	八	九	十	「霜凍る宵」(大正十一年五月「新小説」初出)	一	二	三	四	「霜凍る宵」(大正十一年七月「新小説」初出)	一	二	三
十一	十二	十三	十四	十五	十六		十七	十八	十九	二十		二十一	二十二	二十三
五	六	七	八	霜凍る宵二六三〜三六三ページ			一	二	三	四	五	六	七	八

本文そのものの変化は少ない。ルビの増減はかなり見られるが、主として語句の訂正がほとんどである。文の異同、語句の異同の例を挙げる。と次のごとくである。

初出雑誌
↓
単行本『黒髪』
黒目がちの眼
↓
黒眸がちの眼

九月の中旬 九月の下旬
なんども なんども
疾語した。 と、早口にいった。
ただ莞爾して 微笑しながら
そこに坐ると そこに腰を下ろすと
という具合のもので、大幅な改訂というものはない。単行本から『傑作選集』版との異同は次のごときものがある。

独棲生活 ↓ 独身生活
あんたが実意を打ち明けた あんたが真実を打ち明けた
金だけ長い間送って越す 金だけ長い間送って寄越す
長い間降りつづいた秋霖が 長い間降りつづいた秋雨が
霽れると 霽れると

この程度の訂正であり主として語句の場合が多い。ただ先に触れたように「女」の名前が「お園」に統一されたことが大きな変化であった。こうしてみると雑誌連載が七ヶ月にわたっており、それを書きついでいるうちの秋江の作に対する態度の変更もあったはずなのだ。

(ノート その一)

注一 紅野謙介『「黒髪」論序説―八潜戸の世界』(『近松秋江研究』昭和五十五年八月 学習研究社 三〇一ページ)。
注二 同右『近松秋江研究』所収。